殉難学徒への思い　　浜松市遺族会　阿部俊子

昭和 19 年春、動員学徒として相生町の鈴木織機に派遣された私達四年生は、毎日慣れない旋盤と懸命に取り組む日々を繰り返していました。暑い夏も終わって秋の初めだったでしょうか。会社の好意で一日観劇の会が催されました。

会社の製造部長さんの挨拶、軍から監督に見えていた憲兵の方のお話があった後、校長先生が壇上に立たれました。何時にも似ぬはげしい口調でこうおっしゃいました。

「日本を戦争に巻き込んだのは私達大人である。貴女方にペンをハンマーに替えて工場に行けと命令したのも私達大人である。貴女方には直接責任はないのに黙々と国の為に純粋な気持ちで励んでいてくれる。どんなにか書物に飢え、活字に飢えているであろうか。真剣に働く貴女方を見るにしのびない。戦争を起こした日本をこのような状態にした全責任は私達大人にある…」

あとの言葉は聞いていませんでした。私はただ呆然と校長先生のお顔を見つめました。あの状態の時に、あのような言葉を口にする人はいなかったのです。誰も彼もが国土防衛第一、ひたすら戦うこと、勝つことだけを叫び、またそれに慣らされていた私は、憲兵の方や会社の人達の前にあって、生徒を守ろうとしておられる様な校長先生のお言葉に限りない大きな愛を感じたのです。五郎劇の他愛ない笑いの渦の中で、私は幾度か校長先生のお言葉を反芻（はんすう）してみました。そしてよい先生の許で育てられて幸せであったと思ったのです。

「昭和 20 年 4 月 30 日、 5 月 19 日の両日、米機の無差別攻撃のために、学業半ばにして尊い犠牲となった若き生徒たちを偲び、

長い西遠女子学園の校長生活の中で最大の痛恨事は、可愛い生徒を 29 人も戦争の犠牲にしてしまったことだ。卒業免状ももらえず、冷たい砲弾を抱いて、何の楽しい青春も味わえず、御国のために死んで行った可哀想な子供達…本当にたまらない気持ちがするのです。」

と心境を吐露され、

「昭和 19 年、戦争はいよいよ激しく、国内戦禍はいよいよ拡大されて、通学は危険となり、登校は中止されて、学区は各通学区域毎に分散されて、寺院や父兄の住宅を借りてわずかに続けられた。昭和 19 年の春には、遂に中等学校にも学徒動員令がくだり、中学一年生は農家の手伝い、二年生以上はそれぞれ工場に動員されて、汗と涙と血の苦難な生活が続けられた。生徒たちの工場の生活は、朝 7 時に出勤、学徒の矜持をすてさせず、たとえ僅か 1 時間でも工場の机に向かい、授業が終わると、『君見ずや、明日は散りなん花だにも、力

の限りひとときは咲く』の歌を朗読して、工場の現場にそれぞれ散っていって、油と汗にまみれながら彼女たちは慣れない仕事に、黙々と働き続けた。

かくして、昭和 20 年 4 月 30 日、 5 月 19 日の両日、米機の無差別攻撃のために、尊い犠牲となって若い命の幕を閉じた。

ただ彼女たちは、学業半ばにしてたおれたので、学校法規上、卒業生として扱うことが許されず、従って、卒業生名簿に記載することができなかった。祖国のための、その尊い犠牲を思えば、それはあまりに悲惨であり、痛ましいことである。」と殉難学徒に思いを馳せている。

（平成 12 年発行の浜松市戦争戦災体験の記録より）

竹の子べんとう　　浜松市遺族会　天野ふ志江

昭和 20 年 4 月 4 日夜、広沢の我が家の戸を叩く音がしました。誰かと思って出てみると、満州鉄道に単身赴任していた夫でした。突然でしたので驚くと、長男の衛から手紙をもらったので帰ってきたというのです。

…浜松にも何回か空襲があり、いつどうなるかわかりません。お父さんに会いたいから帰ってきてください。…という手紙の内容だったそうです。

この手紙のおかげで、夫婦と子供 4 人の何年ぶりかの一家団らんとなりました。この時、衛は浜松工業学校の生徒で 15 歳、夫が国を衛ようにと名付けました。親の口からいうのもなんですが、親孝行で、できのよい子でした。私は生まれも育ちも樺太で、浜松の地に知り合いはいませんでしたが、衛君のおかあさんならということで信用してくださる方もおりました。

戦いの中でも季節は春を迎え竹の子が出回り始めました。夫も浜松に帰ったことだし、乏しい米を集めて竹の子ごはんをつくりました。その頃の浜工は寺島町にありましたが勉強どころではなく、学徒動員で金原用水を兵隊さんと一緒に掘っていました。

4 月 30 日の朝、衛はほころびをつくろった地下たびに学生服、竹の子ごはんのお弁当をもって元気に出かけました。そして数時間後物言わぬ人になりました。浜工では生徒 5 人、先生 1 人が亡くなり、衛は艦載機の爆撃による爆風で服が木にひっかかっていたそうです。竹の子ごはんのお弁当がそのまま残っていました。この大好きな竹の子ごはんのお弁当を食べられずに、これからも永久に食べることのない衛を思って泣きました。体がバラバラになった人もいたそうですが、衛は傷一つありませんでした。ですが焼場に行く時、座敷から玄関までおどろくほどたくさんの鼻血を出しました。若くして死ななければな

らなかった衛との別れと未練のように思われ、今でもその光景は忘れられません。

5月17日、夫は満州を引き上げることを決意して残務処理のため中国へ行きました。それっきりです。知り合いも少ない浜松に母子4人とお腹の赤ん坊が残りました。

6月17日の浜松大空襲では焼き出され、道一つ隔てた付属小学校は焼け残り、1週間そこで暮らしました。舞阪での半年の疎開暮し、布橋での戦後生活、悲しんでいる暇はなく、今日のごはんをどうするかという毎日でした。「三度のご飯を二度にしてもお母さんと離れちゃいけない。死ぬときは一緒だ」自分にも子供にも言い聞かせました。まわりの人にも助けられ、好きで習った洋裁で身をたて、寝る間も惜しんで働きました。

月日のたつのは早いもので、衛の手紙のおかげで誕生した子も50歳になろうとしています。でも何年たとうとも夫も衛も心から離れることはなく、毎晩仏壇に話しかけています。

（平成12年発行の浜松市戦争・戦災体験の記録より）

戦争とその家族　　**浜松市遺族会　鵜飼重雄**

「国破れて山河在り」の詩を地で行く、昭和20年9月21日零時30分頃、掛川の戦友と車中で別れてたった一人で浜松駅に降り立った。鹿児島より軍務の合間に民間人との話で、浜松方面が「空襲や艦砲射撃」でかなり被害のあったことは聞いていた。現実にこの光景を見た時は、「驚愕」と「悲しみ」で一瞬たじろいだ。ホームはほぼそのままであったが、屋根があるわけでなく、駅舎も跡形もなかった。周囲を見回しても、「灯火」一つあるわけでなく、わずかに鴨江方面と思われる方向に灯火が5つ、6つ。人が住んでいる証だ。これで少しは「ほっと」した。しかし、終戦より既に1カ月余り経過しているのに「焼け跡」特有の臭気が鼻につき、空襲のすさまじさが想像できた。我に返り改札口へと出た。夜間ということから誰ひとり居ない。駅前広場を出てから、焼ける前の家並みの記憶をたどりながら板屋町道路に入った。ふと夜空を見上げると、おぼろ月夜のわずかな明るさの中を霧雨が降ってきた。が、衣服を濡らす程でもなかった。今でも物寂しいあの光景を思い出すが、不思議と「恐ろしい」とは思わなかった。家に向って夢中で歩きながら、「果たして家はあるだろうか？」「無い時はどうしようか？」と次第に「期待」と「不安」の気持ちに襲われながら歩くほどに、まばらに残る家が見えてきた。勇気百倍、やっと嬉しや焼

け残っていた我が家に戻った。何やら人の居る気配がしたので雨戸を二、三度叩いてみたら、なんと見知らぬ人が戸を開けて出てきたので、一瞬不安な気持ちになった。すぐ氏名を名乗って、「ただ今復員して、浜松駅に降りたばかりである」との事情を説明し、ひょっとしたら、家族の消息を知っているかも知れないと思い、重ねて尋ねたところ、空襲で、お父さんと、子供さんが亡くなった事を話してくれた。

後日の話だが、当時ここのご主人は、６人も亡くなった事を知っていたが、何も知らずに来た私に同情して、真相を秘していたことが判明した。その細かい配慮に感謝した。ご主人も、夜中で気の毒に思ったのか、「今夜は泊って、明日訪ねた方がよいのでは」との暖かなお言葉に、私も「軒先でもよいから」と言ったが、家族同様に泊めてくださった。勝手知った我が家に、７ヶ月ぶりに横になったが、ご主人の話を聞いてから寝つけず、それでもしばらくまどろんでいたら夜が明けた。朝起きてからご主人が、近所の人に母の疎開先を知っている人が居るからと聞いてくれた。折よく近所の渥美さんというお爺さんが案内役をかってくれ、同道して頂いた。

遠鉄小林駅から東へ歩いて 30 分位のところ。「浜名郡中瀬村古中瀬」という所だった。槇囲いのかなり広い屋敷に着いた。門を入り 15、6 歩歩いて静かに表戸を開けたら、ちょうど母が秋のお彼岸を迎えて、仏様に供えるお饅頭をこしらえている最中であった。母にやっと無事復員して来たことや、昨夜の出来事を話したところ、母から初めて「留守家族６人が全員亡くなったこと」を告げられ、一瞬、奈落の底に突き落とされた様なショックが全身を走った。

「母曰(いわ)く」「お前もこれから大変だろうが、自棄(やけ)をおこさず一生懸命やってくれ」との言葉が返ってきた。お饅頭づくりをしている間に疎開先の方にもお世話になったお礼を述べる。のち、部屋の片隅に置いてあった本箱の中から、「白木の御位牌」を取り出して、６人の戒名を一人ひとり詳しく教えてくれた。しばらくその御位牌を押し戴いていると、とめどもなく涙が出て、在りし日のあの和やかな一家の面影が偲ばれた。残された「４つと、２つの妹」が無心に私の姿を見つめていた。

それからしばらくの間は母と毎日、６月 18 日当時の、父・弟・妹達の殉難の日々を語り合うのが日課であった。母の話によると、19 日早朝、隣組の方の「一家全滅の知らせ」に急いで入院先の日赤病院に駆けつけた時、２番目の妹は息も絶え絶えに「お母さんと分かるけど、全然顔は見えない」と…。内臓損傷で排尿は既に血尿であったそうだ。比較的元気だった２人の小学生の弟達も、

火傷をした父をリヤカーで運んだと誇らしげに何回も何回も母に語ったとか。その父も、燃え散る油脂を体から取り払おうとして、熱い熱いと言いながら、防火用水につかってそのまま息を引き取ったらしい。母は 19 日、病院で終日付き添って看護していたそうだが、夜は燈火管制で病室は暗く、あちらこちらで絶え間ないうめき声やら助けを呼ぶ声などで、この世の地獄というものがあるならば、これが本当の「生地獄」というものだと口癖のように語った。当時の「治療」は薬品不足で、現在ならば治る負傷も、「破傷風」のために 2 人の弟も、翌 20 日相次いで息を引き取り、神も仏もないと感じたそうだ。そんな気丈な母と二、三度「姫路の慰霊祭」に参加したこともあったが、「86 歳」で一生を全うした。

「日本の大陸の生命線、満州国」とか、子供には理解できないスローガンが毎年毎年叫ばれ、挙句の果ては「支那事変」となり、「早期解決・不拡大方針」の政府声明もなんのその、今度は「太平洋戦争」につながって敗戦となり、幾多の戦争犠牲者を出したことは、今更言うまでもなく、まぎれもない歴史的事実である。

この記録は、私と健気に戦後 50 年の歳月を頑張ってきた「母の体験談」であるが、我が家としても末永く語り継がれるよう祈念して筆を措く。

（平成 12 年発行の浜松市戦争・戦災体験の記録より）

戦争と私　　**浜松市遺族会　小山敦子**

連日の空襲警報発令で、昼夜を問わず防災頭巾にリュックサックの姿で、家の床下に掘った防空壕の中に居る時間が多くなりました。

忘れもしない、あの 6 月 18 日の夜は、まさに非常事態の発生でした。

焼夷弾が落下し、火災が発生したので、「みんな、火のない所へ逃げよう」ということになり、父と兄は家の近くへ、母と長女、次女、弟、私達は隣のおばあさんと一緒にとにかく遠くへ逃げた。夜が明けてみると、どこだか知らない所の田んぼ道にいました。周りを見ると一緒に逃げたはずの家族の姿はなく、私は逃げる途中でみんなとはぐれてしまったのです。家族とはぐれてしまって困っていた時、私の困っている表情を見て女の人が声を掛けてくれました。私の上着につけてあった名札を見て、私の家まで連れて帰ってくれました。後で知った事ですが「ヤマヤ」のお嬢さんだったそうです。

町は一夜にして焼け野原と化してしまい、９歳の私には何が何だかさっぱり分かりませんでした。父、兄、長女、弟たちとはすぐに会えましたが、母と次

女はお昼を過ぎても消息が不明でした。私達はとりあえず母の実家である舘山寺の家へ行く事にしました。

行く途中、至る所に焼夷弾の筒や不発弾らしきものが落ちており、爆撃のすさまじさを感じました。行き交う人々の中に、もしや母と次女が居ないかと一生懸命探しながら歩きました。途中、鳥居先という所で差し入れのおにぎりを頂いた時のおいしかった事。

母の実家に着いてみると、他に 2 家族の人達が来ていて、実家の家族が 12 人あり、まさに大家族の生活でありました。2 日後、母と次女が防空壕の中で焼死していたという知らせがありました。

その後、いつまでも母の実家に世話になっている訳にもいかず、ちょうど磐田に空室があったのでそこに移り、やがて浜松に形ばかりの家を建てて住むようになりました。しかし、雨が降ると雨が漏り、晴れるとベニヤ板の屋根がそって太陽が差し込むありさまでした。また、物資の足りない時勢でしたので、時には、米津の浜へ行き、石油缶で海水を煮詰めて塩を作ったり、アイロンの箱の内側に鉄板を張り、パンを焼いたりした事もありました。

その後、姉は住み込みの見習い看護婦として勤めに行き、弟は他所へもらわれて行き、やがて私も、磐田の親戚の家へ行くことになり、家族がバラバラになってしまいました。しばらくして私は、今度は静岡県と長野県の境の、本当に山また山を越えた山村の家へ行くことになりました。その家での私の仕事は、当時、山村では電灯がなく、代わりにランプを使っていましたので、その「ホヤ」というガラス管みたいな物をきれいにする事、回覧板を山を越えた約 5 km 程離れた家まで見せに行き、そしてそれを今度は、分教場に届ける事でした。いつも犬と一緒で、時々熊の親子、鹿、猪、うさぎなどを見ました。はじめは、それが本物とは思えず、月日が経つうちに本物であると知り怖くなりました。

その家のおじさんは猟師で、熊や猪や鹿などを獲り、毛皮を売り、肉は食べていました。私がいつも食べていた肉は、その肉かと思ったら、食事がのどを通らなくなったのでその家でも困ってしまい、弟のいる町の近くの家に養女に出されました。

その頃、浜松で見習い看護婦として働いていた姉が亡くなったという知らせがありました。死の直前まで一生懸命働いて、その為の過労死と分かりました。あの空襲から 3 年後のことでした。結局は姉の死も、「戦争の犠牲」になったと思うと、かわいそうで、残念でたまりませんでした。

養女として入った時は、「栄養失調」や、たらい回しにされていたという事

から同情してくれましたが、私としては、いろいろな家にお世話になったお陰で、生きのびられたという感謝の気持ちで一杯でした。

母や姉が亡くなってから、もう 50 余年になります。現在でも、時々母や姉の面影を偲び、「生きていたらなあ」と涙することがあります。「戦争さえなければ」と今更いっても「ぐち」になりますが、こんな苦労や体験は、私一人で沢山だと大声で叫びたい気持ちでいっぱいです。

（平成 12 年発行の浜松市戦争・戦災体験の記録より）

私の人生　　浜松市遺族会　佐藤康一郎

戦後 50 数年を経た今日、戦後の混乱期を何とか乗り切って、「古希」を過ぎて遠からず「喜寿」を迎えようとしている今、安穏な生活を頼っても世相の荒廃は目を覆うものがあります。そして、国家の存亡に一命を賭けたことを誇りに思い、今日あることに感謝している現在です。

昭和 12 年戦争が始まった頃から、世の中がだんだん活気づいたというのか全て忙しくなって来ました。私の家は「煉瓦工務店」で、従業員も大勢なもので、私も早く父の片腕になるようにと名古屋工業学校に入学し、下宿することになりました。幸せ一杯の家庭を後に、戦争一色となり「食糧等も配給制」となった統制時代の一人旅でした。学校でも勉強するのは僅かで、農家の手伝い、荒地の開拓に行くくらいで、毎日のように「空襲と食糧」で苦労するようになりました。そして、軍需工場に学徒動員になり、勉強に来たのに兵器を作る手伝いなんて気の進まない毎日でした。空襲も激しくなり下宿にも居られなくなりました。志願兵の募集もあったので、「陸軍幹部候補生」の試験を受けて入隊する事になりました。

名古屋駅前で学校全員の見送り、胴上げを受け、「小豆島の暁部隊で 4 ヶ月訓練」の後、「特攻要員」として江田島に移され特攻訓練に入りました。爆雷を抱えて敵の艦に体当たりするのです。実家に便りを出すのですが全く返事がなく、落ち着かない毎日でした。B29 がものすごく来るようになって、呉から瀬戸内海に入って、岩国の方へ抜けていく何百機という毎日の空襲でした。

そして 8 月のあの原子爆弾でした。直ちに広島へ集合するようにとの命令で宇品から広島市内へ入りました。桟橋には死骸が俵の様に何ヶ所にも積み重ねてあり、市内は瓦礫の原野と化し、道路と思われる両側には死体の列、家の下敷きで死んでいる人、歩いている人は真っ黒に焼きただれ、「我が子、我が親」の名を叫びながら、行く宛のない死の旅路か。「重傷者は似の島」へ舟で運び、

我々の隊は死体処理班とのことで、死体を担架で川西の穴まで運びました。

宇品より千田町、昭和町、国泰寺町と７日間、夜は駅近くの屋上に寝ていました。火事で５ヶ所くらいが燃え続けても消す人もいない状態でした。時々玄米のおにぎりの配給を受け、水道管の溜水（ためみず）等を飲んで、ものすごく暑い８月の炎天下で「暑さと疲れ」で「放射能」とも知らずに吸いたいだけ吸って身体がくたくたになりやっと隊へ戻りました。

そして間もなく「終戦の詔勅（しょうちょく）」で「家に帰ることができる」と力が湧き元気づきました。すると中隊長から、「一家七人焼死（６月１８日)」という官報を渡された時は言葉も出ませんでした。特攻隊に出動が決まっていたので知らせなかったと詫びられました。そして、江田島のお寺で「四十九日の法要」を行って下さった五條大尉を忘れる事は出来ません。

９月 12 日貨車で復員しました。浜松駅に降りるとやはり広島と同じ焼け野原で、戦禍の惨めさを覚えました。そして、実家の焼け跡に立った時、「偉大な父母は帰って来ない」今の自分はどうすればよいのかと考えると、身体が動かなくなりました。復員する時に頂いた２年分の給料も、駅で「一コ十円のおにぎり」では心細くなりました。一応落ち着く所を捜さなければと歩き回りました。市役所へ行っても親戚もわからず、駅の休憩所で話しかけてくれたおばさんから、「村櫛へ行ってみなさい」と言われ、叔母さんの家に行ってみました。暫く叔母の家に世話になっていましたが、いつまでも世話になってもおられず、昔の土地を借りてバラックを建て、父のやっていた仕事を修行しながら始めました。静岡、熱海、東京と修行に歩きました。

放射能を浴びているためか身体が弱く、その後は病気ばかりしています。昭和 22 年には渡辺病院に「急性腎臓炎」で１ケ月、３月 15 日には「肺浸潤（しんじゅん）」で小島病院で１ケ月。最近は目が悪くて医大病院へ 70 日間入院し、現在通院中で、私も正しく戦争被害者です。

（平成 12 年発行の浜松市戦争・戦災体験の記録より）

お昼はじゃがいもひとつ　　浜松市遺族会　杉浦芳己

子供達に、今日のお昼は「じゃがいも」でどうかと聞いたとしたら、「いやだ」「いらない」「店でお弁当を買ってくる」と返事が返ってくると思います。

50 余年前（昭和 20 年１月）に私は、静岡第二師範学校の生徒として、学徒動員令により、浜名郡新居町にあった中島飛行機製作所新居工場で、エンジンの部品焼入れに「１日３交替」で働きながら学習や教練を受けていました。そ

の期間、食事は朝昼晩「食券」にて食堂の前に行列をつくり、ドンブリと皿を受け取ってテーブルにつき、ポケットの箸を取り出して夢中で食べ、短い時間で食事を終えました。当時 16 歳の私達は食欲旺盛で、いくら食べても満腹感をもった時はありませんでした。

ドンブリの中はいつも大豆の粕（かす）、高粱（こうりゃん）、さつまいもなどが米といっしょに炊き込んであり半分程の量しか入っていません。また一日のうち一回は「すいとん」といって、おつゆの中に野菜が入り、うどん粉を練っただんごのようなかたまりが、３つほど入ったものをいただいていました。だれも文句を言う人はいませんが、常に腹がへった状態でした。

日増しに食糧事情が悪く、たまに肉がお皿に乗ったおかずは、ひよこの焼き鳥であったり、野菜と思って食べたものはさつまいもの葉でありました。

７月の始め、夜勤の私は寮の部屋で寝ていました。午前９時頃だと思います。空襲警報のサイレンと同時に物凄い爆発音で、あわてて布団にもぐりこみ上から押される感じでのぞき見をしましたが何も見えません。きな臭い匂いが漂い、これは大変だと気付き布団からはい出しましたが、部屋の出口が見つかりません。同僚の声でやっと出口に出てからまた大変です。廊下は無残にも天井は落ち、壁や窓枠もふっとび歩けません。かすかに見えた階段に向って夢中ではい出ました。隣の寮がロケット弾の直撃を受け、私達の寮も爆風でメチャメチャに破壊されたことが解りました。その後、近くの寺に集合し、寮が全滅したので鷲津工場の寮に順次移ることになったのですが、まだ昼食をとっていないことがわかって、食堂に連絡したら、大きなざるに「ゆでたじゃがいも」を入れて運んでくれました。食堂のおばさんは、一つずつ分けてくれた時もう一つと片方の手を出すと払いのけ立ち去りました。直径５cm 位、手の平にちょこんと乗ったじゃがいも一つ、寂しく、哀れに思う間もなく、皮をむかずに食べてしまいました。これでお昼ごはんが終りです。当時、食べ盛りの私達は仕方なく荷物を整理し、新居から歩いて鷲津に向いました。

国民全体が苦難の時、「欲しがりません勝つまでは」「ぜいたくは敵」と、我慢を通しました。それでも標準以上の体格となり、丈夫に育ってきたことが不思議と思うことがあります。

現在、食べ物の心配もなく、自由に好きな物が腹いっぱい、いつでも食べられる子供達は、過去に「食糧難の時代」があったことなど知らずに生活しています。食べ物や調理する人に感謝する気持ちを是非持ってもらいたいと願っています。

（平成 12 年発行の浜松市戦争・戦災体験の記録より）

残念・無念な想い出　　**浜松市遺族会　鈴木東二郎**

私も、80 年この世に生をうけ、思えば 50 有余年前、私のまわりに戦争という文字がだんだん身近に感じる時代でした。

友人が昭和 14 年頃今の中国で戦死し、戦争のことを身近に感じたものでした。

当時、国家総動員法ができ、忘れもしない昭和 17 年に、私のところに豊川の海軍工廠へ入廠の徴用令が来ました。その時、父が海軍工廠の門前まで送って来て何か言ったと思いますが、今となっては思い出す由もありません。

その日浜松駅で宮沢君という人と会い、彼と別れるまで一緒にいました。彼は、支那事変で兵隊として負傷して内地送還になり、傷も治り何年にもならないのに今度は徴用工員として入廠しましたが、その時、彼は政府の行政に対し納得が出来ないとよく言っていました。彼とは唄の文句ではないが、血肉を分けた仲のように良く気が合ったものでした。その彼に、昭和 18 年に再び召集令状が来て「今度は、生きて日本の土を踏むのは無理だろう」と言って、下宿の壁に「海ゆかば、水づく屍」の文句を書いて出征しました。私はあの時の別れが今でも瞼の中にはっきり浮かんでいます。

戦後、彼の親から戦死のことを聞き、「諸行無常」、どうしてこうも世の中が不公平なのか腹が立ちました。

私は昭和 19 年 4 月結婚しました。当時は誰もが耐乏生活でした。その私にも昭和 20 年 4 月召集令状が来て名古屋の部隊に入隊。護国部隊として、浜北の岩水寺に駐屯しました。それから 8 月 15 日分遣先の役場で終戦のラジオを聞き、戦争の終わった事を知りました。分遣先の整理をすませ本隊の岩水寺に合流しました。

９月になってから一通の葉書が私の所に来ました。文面は、父が 6 月の空襲で焼死、母は実家で病死になった内容でした。当時のことを思うと呆然自失、世の中はどうなっているのかと疑うよりほかはなかったです。当時の葉書の日付を見ると、部隊の動きが察知されないよう、何事も自由が許されない世の中でした。

私は、隊の残務整理が残っていたが休暇を取り、浜松まで来たが今のようにバスが無く、歩いて母の実家まで行きました。

母の実家に着いた時、母の葬儀も済み、私の知らない所での色々な出来事を

聞きました。それは母の悲劇そのものでした。夫を空襲という文字の中に一瞬のうちに亡くし、家は丸焼けとなり何も残っていない中で、母は辛い毎日であった事と思います。

焼け出されて、親類を頼り身を寄せて居たが、そこもままならず私の妻の実家に世話になりました。親切にしていただいたが、私にしてみれば嫁の実家ではあるが心苦しい事でした。

母は自分で判断して、一番下の弟を連れて自分の実家に行ったと思うが、それも安住の場所ではなかったらしい。その頃、急に体調が悪くなり、当時は終戦直後で食事、医者、薬とて十分ではなく、病気になれば最悪の所へ行くしかなかったと思うと、母の残念無念、心中を察して余りある事でした。

夫を空襲の中で失い、70 日余り過ぎた 8 月末に亡くなったことを聞き涙も出ませんでした。

母は 51 歳で生涯を終え、現在ならこれから楽しむ年なのに、それまで一生懸命働き、戦争の余波を受け不運な人生を終わり、私としては今でも忘れられません。

当時は父も母も土葬だったので、寺の住職の意見を聞き、現在の墓の中にその場所の土を入れ供養しました。

あれから 54 年過ぎた現在、あのことはどうにもならない時代であり、どうにもできない事であったと、自分の心の中では判っているが、それでも残念、無念でなりません。過ぎた日のこの出来事は、私の心と瞼に残るだろう、いつまでも…。

（平成 12 年発行の浜松市戦争戦災体験の記録より）

西部ニューギニア地域戦跡巡拝団に参加して

浜松市遺族会　加藤えい

長い間の念願であった西部ニューギニア地域戦跡巡拝団の総勢 60 名が成田空港を出発したのは昭和 56 年 10 月 16 日でありました。宿泊先のバリ島デンパサール、ハイアットホテルに着きここでマノクワリ、ジャヤブラ、ビアク島の 3 班に分かれ、翌 17 日私達一行 19 名はビアク班に加わり最初の追悼がセレベス島の海岸で行われました。

18 日は待ちに待った夫の眠るビアク島に向いました。赤道直下 40 度近い灼熱地獄のような島に着いた時は、夫がどんな思いでこの地を踏んだのだろうかと、当時を偲びビアクでの第一夜はなかなか眠れませんでした。

島内にある南洞窟と呼ばれる巨大な洞穴には約 2,000 名にも及ぶ日本兵が有力な連合軍の空軍や海軍部隊、火焔放射器などにより強烈な砲撃を受け焼き殺されたと伝えられております。ホテル近くの海岸には砲弾や戦車の残骸がそのままで、山際には日米両軍が交戦したと思われる当時の兵器等が、まさに戦場の墓場であり、無残な姿で残されておりました。

19 日はモワメルへ向い、白い珊瑚礁の砂浜で追悼が行われました。眼前にはやはり当時のままの戦車の残骸があり、戦争の激しさを物語っているのが感じられました。

夫の戦跡は島の北側コリム湾への道を左折した未踏の地とも言われた所に水源地農場あとのワホールがあり、炎天下車を降りた私はその場に呆然と佇んでしまいました。

戦うには弾薬なく、食べるには食糧もなく、悪疫に苦しみ、遂には持久戦に耐えられず日本兵 37 名が餓死したとのことです。夫もその中の一人でした。決戦の様相が異様なまでに私の脳裏をよぎっていきました。同じ部隊の岩手県の松井様と夫の慰霊祭がここで行われました。朝食の後、皆様のご好意でおにぎりをつくっていただき、煙草、菓子、お酒など、又持参していった花輪、写真、お供え物を供え、全員が読経する中に新たな涙にむせび「あなたお迎えに参りました。いっしょに帰りましょう。みんなが待っておりますよ」と語りかけるように合掌しました。日程を全部終えて帰国したのは 10 月 24 日でした。

かつては激戦地であったビアク島は生還者も皆無とさえ言われ、島内の住民感情もわからず不安におびえながらの訪島でありましたが、現地人に大変あたたかく迎えられ無事帰国できましたことを何より嬉しく思いました。

しかし戦後 36 年経た今日も、なお島の生活は乏しく、現在国内に住んでいる私達には到底耐えられないような生活程度の低さに驚きました。この地で散華していった父、兄、夫たちの心情は如何ばかりであったかと思い、再度の訪島を誓いつつ日本遺族会の皆様、又同行された遺族の方々に心から感謝とお礼を申し上げます。ほんとうに有難うございました。

（昭和 57 年発行の浜松市遺族会会報より）

浜松市街大火災のころ　　**浜松市遺族会　伊藤ゆきゑ**

昭和 17 年に主人が召集されましたが、その少し前に浜松市街地から少し離れた田舎に移り住むようになりました。19 年頃から浜松市内には焼夷弾を始めとする爆弾が落とされ、田舎から見ると市内全体が真っ赤に燃え上がり、今頃

市内に住んでいたならば二人の子供を抱えてどうなっていたのかと、ゾッとする思いの日々でした。

何回かの空襲で主人が勤めていた会社も私の実家も爆弾で吹き飛んでしまい、とても悲しかったことが今でも心に焼き付いております。

連合軍の艦船による艦砲射撃の時は、始めに飛行機が市内の上空で照明弾を落とし、一時は真昼のようにしてから大砲を打ち込んでくるので、私は下の子供を背負い、上の子供の手を引いて軍隊が作った山の防空壕に急ぎました。

防空壕の中は村の人達で一杯の中、艦砲射撃の弾が近くに落ちると山全体が揺れ動き、頭の上に土がバラバラと落ちて子供達を抱き抱えながら生きた心地がなく、ただ震えて砲撃が止むのを祈るばかりでした。壕の中にいたそれぞれの家族もみな同じであったと思いますが、中にはお念仏を唱える人もあり大変怖い毎日でした。

戦時中は何もかもが配給の時代でした。そのような中で近くのお百姓さんはわが家の生活がわかるため、食糧を高くは売れないためでしょう売り惜しみをされることが多く、結局少し離れた知らない農家まで行って自分のきものと交換してもらって何とか凌いで生活してきました。乳母車に子供と一升瓶を乗せて、３km 程離れた遠州灘の海岸まで海水を汲みに行きその海水を煮詰めて醤油代わりに使っておりました。

お百姓仕事は未経験でしたが、幸いにも山の上のお茶畑を貸してくれる方がありましてそこを開墾して、そばとさつま芋を植えやっと収穫したら、たしか農業委員の方だったと思いますが「この量は大人１人と子供２人が食べていける量だから１ケ月お米の配給を止める」と言われ、育ち盛りの子供にお米がなくてはと、泣くにも泣けない口惜しく情けない思いをしたことがありました。近くの農業委員の役員の方にわけを話してやっと少しだけお米の配給を受けることが出来ました。

その頃は芋だけではなくさつま芋のつるまで重要な食糧となり、僅かばかりのお米と混ぜて食べていた頃は本当に生きていくのに精一杯の日々でした。

終戦直後、ラジオを持っている近くの人から「ラバウルから兵隊さんが帰って来ると放送があったので、ご主人も直に帰って来るよ」と伝えられ、それからの毎日どんなに待ったことでしょう…

夜中に遠くから聞こえてくる靴の音に聞き耳をたてていると、家の前を通り過ぎ遠くに去って行く…そんな繰り返しがなんとも空しかったことでした。・・・・・

昭和 55 年 10 月ラバウルから復員された方々と遺族 3 名の 29 名が南太平洋戦没者慰霊巡拝団として、ラバウルを訪問することが出来ました。官邸山と言うところにある日本政府とパプアニューギニア政府の協力により建てられたばかりの碑の前で、慰霊祭が行われました。戦死された方々の御霊もどんなにか喜んで頂けたことかと思います。

主人が戦死したタウリル農場付近を探しましたがわからずに、諦めて帰りかけた時、50 歳過ぎの現地の方と偶然にもめぐりあい「タウリル農場は自分の部落だ」と言って案内してくれました。今は椰子林になっているが兵舎が建っていたという場所に、家から持ってきたお米、塩、水、ローソク、線香をあげ般若心経を唱え冥福を祈ることが出来ました。

ラバウルに来れただけでも嬉しく思いましたが、同行していただいた皆様のご協力のお陰で主人が眠るタウリルまで行くことが出来まして感慨無量でした。

昭和 17 年に主人に召集令状が来て以来、16 年生まれの長男、戦地に出立してから生まれた次男の二人を育て、衣食住の苦労も多々ありましたが、丈夫で何事もなく育ってくれたことだけが、亡き主人に対して胸を張って伝えられることでした。

やすらかに眠って下さい。

運命の昭和 20 年 6 月 18 日浜松大空襲

浜松市遺族会　奥村利彦

尾張町の自宅から、上池川町の家に疎開してきたのは一昨日（6 月 10 日）であった。

この家は父の友人（松井航空の高橋さん）が信州の実家へ疎開するので、いざと言うときのことを考えて父が借りることにした家であった。私は浜商二年 13 歳であった。学校にも近く、長男でもあり祖父、祖母の世話をするということで一緒に住むことになった。夏でもあり、さしあたり布団・ナベ・釜・勝手道具類を乳母車に積んで、六間道路の坂道を上がった追分交番の裏の借家へ移った。翌日 17 日も学校から帰ると、尾張町の家から足らないものを乳母車に乗せて持ってきた。当時は空襲も激しさを増し、各家では田舎へ疎開が盛んに行なわれていた。

私の家ではやっと所帯道具を、母の実家の上石田の家に持って行こうと荷造りが済み、家の中の防空壕の上に積み込まれていた。大八車（当時の唯一の輸

送手段）が何時借りられるか、父の休暇が何時とれるか分からないので、傘屋の店先に疎開道具が積んであった。その下は防空壕であった。この防空壕は店の（八畳）床下に、父が会社（松井航空＝三菱重工の下請け会社）から帰って来て食事の後、毎夜私と一緒に掘ったものであった。以前に作ったコンクリートづくりの防空壕があったが、出入り口が家の中にあったので家屋が倒壊した場合脱出できない危険があったため、新たに出入口を道路に作ったものであった、広さは約六畳くらいで、非常用の米・水・バケツ・梅干しなどと一緒に空襲があると家族で退避して、警報の解除を待ったものである。

6月17日は日曜日であった。日本晴れの蒸し暑い日であった。午前10時ごろアメリカのB29、一機が飛んできてビラが撒かれた。「マリアナ時報」というルビつきの日本字の豆新聞が二種類撒かれた。フィリピン戦況・東都心臓部戦災状況・沖縄戦の不安な記事などが書かれていたらしい。この日は珍しく昼間の空襲はなかった。嵐の前の静けさ、不気味なうちに時は過ぎて行った。

今日もお客さん（B29の空襲のこと）が来るのかな…と思いながら9時頃寝床に入った。このころは夜は空襲が多く夜中に起こされるので、眠れる時はなるべく早く寝た。一寝入りした午前零時ごろ、突如警戒警報のサイレンがけたたましく鳴り渡った。寝床から起き出し身支度を整え、庭の防空壕へ走りながら夜空を見上げたら探照灯に照らし出されたB29爆撃機が、低空で飛んでいて不気味に見えた。すぐ空襲警報のサイレンが鳴り響いた。すでに西の空が赤く染まっていた。鴨江方面にすでに焼夷弾が落とされていた。これは何時もの空襲とは違う、怖いと思った。後は防空壕の中で祖父・祖母と一緒に震えていた。そのうちザーという音が聞こえた。祖父が防空壕の外へ様子を見に行った。なかなか帰ってこないので心配だった。後で聞いたら家の塀に焼夷弾の油脂が飛び散ったので、火たたき（竹の棒の先へ縄を巻いて塵払いのようなもの）で消していたとのことであった。祖父の年は68歳であった。昭和22年70歳でなくなった。

敵機は1時間もの間波状攻撃を繰り返し、浜松全市を灰燼にして立ち去った。

午前4時ころ警戒警報になった。下町の空は真っ赤に染まり熱い風が吹いていた。尾張町の家ももう駄目か？何とか早く親、兄弟の安否を知りたかったので、一人で六間道路の坂を下りて行った。現在のUホール（当時は市の水道課）あたりからどの家も焼かれてくすぶっていた。暑くて煙が目に染みて目を開けていられなかった。熱い空気と、人間や動物が焼かれた匂い、すべてが焼き尽くされた匂いが充満する町を、道端のドブの水を手ぬぐいに浸し目を拭きなが

ら、とにかく尾張町の家の方角を目指して歩いた。途中道路に電柱の焼けたものらしい丸田風のものが沢山転がっていた。死体であった。老若男女の区別はつかなかった。悲しいとか、さびしいとか、苦しいとか、すべての感情はなかった。ただひたすらに尾張町の家を目指した。やっとのことで尾張町の家のあたりに辿り着いた。

家はみるも無残に焼け落ち、父と一緒に苦労して掘った防空壕は焼けた畳の灰で覆われていた。ああ家族みんなこの中で焼け死んだのか、掘って確認しようにもまだ熱くてどうしようもない。でもどこかに避難したかもしれないと、いろいろ考えが浮かんだがそれでもすがる思いで探そうと、街中の主な建物の避難者の群れを探し回った。

主な建物といえば銀行、松菱百貨店で溢れんばかりの避難民でいっぱいであった。死んだ子供を抱いた母親、大やけどの人、手足を折った人、死んでいる人、どの人もただボーッと座り込んだまま動こうともしない。その中をかき分けながら探したがどこにも見当たらない。鹿谷町に横穴式防空壕が沢山あった。よしあそこへ行ってみよう。ひょっとして避難して助かっているかもしれない。切れた電線、破裂した水道管から溢れる水、道路に横たわる死体を横目に見ながら、現場へ着いた。地元の消防団、警防団の人達が死体の搬出をしていた。みんな煙に巻かれて蝋人形のように窒息死していた。一人ひとり確認したがいない。あちらこちら探したが行方不明だ。もう疲れて歩く気力もない。仕方なく尾張町の自宅の焼け跡にもどり歩道に座り込んだ。歩道の防火用水の中にどこの人か知らないが、鉄兜をかぶり男の人が死んでいた。用水の水は一滴も無くからからであった。もうみんな死んでしまったのか、これからどうしよう、収入はないし食べるものはないし、祖父母を抱えどうやって生きて行けばいいのだろう、ただ呆然とするのみであった。

時計はないので時間はわからないが、日が西に傾きかけてきた。避難先から戻って、焼け跡に立ち退き先を書く人が出てきた。だけど自分には何の連絡もない。もう駄目か、ひとりでに涙が溢れてきた。その時、北の方（元目町）から道路を自転車を曳きながら男の人がこちらへ向って来た。近づくに連れて父であることがわかった。また、再開の涙が溢れてきた。父の話では、全員無事で母の在所の上石田へ、昨夜の火の海の中を妹たち、弟たちを負ぶったり、手を引いたりして、何も持たずに逃げたとのこと、本当に嬉しかった。この空襲で、常磐町の村尾病院の村尾君一家８人が、家の近くのマンホールで焼死体となって発見された。ご冥福をお祈りします。

この日の空襲は、B29 約百機による焼夷弾攻撃で、徳川城下町の時代を経て明治新政による建設時代の市民の苦闘、市制施行以来、先賢の努力の結晶など跡形も無く消滅した。

静岡県西遠地方事務所が昭和 20 年 7 月 3 日現在でまとめた「管内昭和 20 年 6 月 18 日戦災対策概況」によると、この大空襲は浜松市内だけでなく、隣接の可美村・新津村・神久呂村・入野村・積志村にも及んでいたことが分かる。

（参考）投下焼夷弾約 65,000 個、死者 1,717 人、重傷 250 人、軽傷 1,250 人、家屋全焼 15,218 棟、半焼 91 棟、非住家全焼 490 棟、半焼 75 棟

婦人部のあゆみ　　浜松市遺族会　小倉てい

戦後 30 年は、私共戦争未亡人にとっては長い苦しい坂道でありました。幼児をかかえ、焦土の中をねぐらに定め、食糧を求めながらの血みどろの生活戦争でした。

今は子供達もそれぞれ独立してようやくホッとした時。頭には白いものが見え、苦労の深いしわがきざまれ、出征当時の若妻がたどってきた今までのきびしさをまざまざと見る思いがする。

戦後、遺族に対する援護の手は、何の保障もなく全て打ち切られ、途方に暮れた遺族達が、長島先生を先達に立ち上がり、全国的な会の組織が出来たのが昭和 22 年の事であった。幼な子を家に残して、度々の遺族大会に上京し、政府に対して切々の陳情を続けたものでした。或る県では白装束に位牌を持って、又或る県では鉄兜に竹槍と、まことにすさまじいものでした。続いて 23 年には婦人部が結成された。

浜松は少し遅れて、26 年 2 月 5 日に初顔合わせ。部長は鈴木こう、鈴木節子、杉浦千代、棚田淑子と私の四人が副部長に選出された。

27 年 5 月 2 日全国戦没者慰霊祭が新宿御苑で催されたが、浜松からは故中村勝五郎会長と私の二人が代表として参加した。この時は両陛下のお出ましを頂き、戦後初めての慰霊祭であった。午後は一同バスに分乗して、白バイに守られながら宮城に到着。陛下よりあたたかいお言葉と、恩賜の煙草を始め数々の品を拝受、感激して宿舎に引揚げました。明くる 3 日には宮城前広場で、吉田首相主催の講和記念祝典に参列させて頂く光栄に浴しました。

その後、役員改選で部長は鈴木こう、副部長は大庭かの、小倉ていとなった。遺児達も進学やら就職の時になって片親の為はねられることが多いと聞き、未亡人のかなしさが一人身に沁み、夫の戦死は全くの犬死であったのか「後を引

き受けた」といって送り出した方々の身勝手さに幾度か夜半の枕をぬらした事か。こうした頃（30 年）神奈川県知事を始めとして多くの知事が保証人となって下さったので、就職の道も明るく、各事業所でも競って採用する様になり、全員手を取り合って喜んだものでした。

37 年 5 月国会遺族議員協議会の中に「戦没者の妻等に特別加給金を支給する件」についての小委員会が設けられたのを第一歩として、私達未亡人の処遇問題は、その手掛かりを得ることが出来ました。

その後、法制局等の立法措置により加給金が給付金と改められ、37 年 8 月 4 日衆議院法制局において起草、同年 8 月 10 日の小委員会で認められ、議員立法として推進する事になったので、日本遺族会婦人部も親会の方々と緊密な連絡のもとに法案の内容を検討し実現を図る事になって、度々の婦人部大会が開かれ、或いは地元の先生方にお願いしたり文書陳情を行なったり執拗なまでの運動を続けた。この間最も感激した一つは、大野伴睦副総裁が最後の陳情をした時「よしよしよくわかった。この年の暮れに一家の主婦が、家を留守にして滞京している事は誠に政治の貧困であって申し訳がない。自分が何とか骨を折ってあげるから、すぐ家に安心して帰りなさい」と私の手を固く握って、お約束いただいたのでした。今は亡き先生を偲んで、忘れる事が出来ません。

こうして 29 日夜の大詰まで靖国神社の北参集所の板の間で頑張り通したのですが、30 万円の要望が 20 万円、10 年償還、無利子という私達への国としての処遇が実現したのでした。明くる日は雨の中を晴々とした心持で、関係の先生方にお礼まわりをして帰郷しました。

39 年には、当時の石井会長さんのご意見で、婦人部は本来の妻の立場で、という事になり、浜松でも私が代わって部長になり、現在に至りました。副部長も杉田、岡田、玉木、栩木、杉浦、天野さん達と交代してお骨折りいただきました。

歴代の福祉事務所長さん、課長さんにも、大変お世話になりましたが、特に古橋課長さんには、婦人部へのご理解、ご指導をいただき、現在の婦人部の基礎を作って下さった事は一同忘れる事が出来ません。

さて婦人部が妻の手に渡ってまいりますと、やはり身近な問題が多く益々忙しくなり、毎日を夢中で飛び回ってまいりました。毎年年末から年始にかけて、公務扶助料の増額、身寄りのない老父母の給付金、或いは非受給者となった遺族への特別祭祀料、又は 2 番目の未亡人への特別給付金、同じく老父母の問題に取り組みました。

靖国神社の国家護持の請願陳情で、神社より国会までのデモ行進にも幾度か参加して、お願いしたものですが、新聞もテレビも甚だ冷淡で、報道すらされず、むなしく思ったものでした。極寒に酷暑に首相官邸に、或いは自民党本部の大理石の床に何時間も座り込みの激しい陳情には、私のような頑健な者も、時には熱を出したり体を壊したりしたものでした。殊に、中井日本遺族会婦人部長さんは卒倒して、意識もなくなり一時は心配する状態もありました。

49 年 4 月 12 日には、徳永先生、村上先生のご努力によって、靖国神社法案が衆議院では可決されましたが、この時は全くひどいもので、委員会の会場前に野党は人垣を築いて先生方を入れず、衛士の牛蒡抜きによって入場されると喧々ごうごう、先生のマイクを取り上げ、あるいは原稿を取り上げ、床を踏み鳴らし、実力で審議を妨害阻止する行動に出たのでした。先生は殴られたり、蹴られたりで負傷され、又身辺が危なくて自宅へもお帰りになれなかったと聞いております。議会民主主義の下で、おだやかな話し合いの出来ない現状に、激しいいきどおりを感じました。引き続き参議院に移り、陳情を続けましたが、ご承知のように、残念ながら廃案となってしまいました。

今や老父母の平均年齢 80 歳を越え、妻といっても 60 歳前後になりかつて圧力団体と新聞紙をにぎわした遺族会も弱体化し、昔のおもかげを止め得ないまでになってまいりました。

永くお世話いただいた親会に感謝しつつ、次代を担う青年部の育成に努めて、婦人部が中堅となって、今後の運営や陳情に当らなければならない時になってまいりました。

婦人部の方々は、これからも心を合わせて遺族のために、なお一層のご努力をお願いして、つたない筆をおきます。

（昭和 51 年発行の浜松市遺族会終戦 30 周年記念号より）